

立命館大学の学徒出陣・学徒勤労動員に関する

アンケート調査中間まとめ

小西康夫

はじめに

- 一 戦局と立命館大学の学徒出陣状況
- 二 アンケート調査—その方法と回答状況
- 三 アンケートにみる理科系学徒の出陣と動員の状況
- 四 回答内容の一部紹介
- 五 送られてきた史・資料

はじめに

本学は一九五三年三月に創立五〇周年記念事業の一環として『立命館創立五十年史』を刊行している。その「例言」で、「本書の編纂にあたっては、当然収載すべき史料あるいは写真にして、終戦時の混乱に際し紛失したものが多く、そのために本書の内容をかなり不備ならしめた点も少なくない」と断っているが、学徒出陣・学徒勤労動員もそれに該当する。

太平洋戦争末期の一九四三年一二月にはじまる学徒出陣、これに次ぐ軍需工場等への勤労働員により、大部分の学生は学業を中断して戦地へ、工場へと動員されていった。全国的な学徒出陣者数、軍需工場への出動者数、そしてそれらの結果としての戦没学生数はいまだ不明であり、個々の大学においても正確な数字を把握できているところは少ない。立命館大学においても、残っているわずかな資料では、当時の学徒出陣の実情や軍需工場動員の事態を十分把握することができず、また当時動員された方々の戦時体験記録もいまま今日に至っている。

一九九三年は学徒出陣五〇年にあたる年であり、立命館百年史編纂室では卒業生を対象に予備調査としてアンケート調査を実施した。

一 戦局と立命館大学の学徒出陣状況

調査結果の内容を紹介するに先立って、立命館の学生・生徒が各時期の戦局のもとで、どのように戦争にかりだされていったかを概観しておきたい。

1、一九四三（昭和一八）年九月の繰り上げ卒業

一九四一年一〇月一六日、第三次近衛内閣が総辞職し、同月一八日、東条英機内閣が成立。一二月八日、米英に宣戦した。政府は、太平洋戦争勃発直前の一〇月、勅令¹をもって、大学・専門学校などの修業年限の臨時短縮を決め、四一年度は三カ月、四二年度は予科、高等学校を加え六カ月、四三年度も六カ月短縮を決

定した。四一年一二月、大学等の最高学年在学者は、二年九カ月で繰り上げ卒業させられた。これらの措置は、「緊急ノ軍幹部要員ヲ充員シ併セテ勞務動員計画ノ要請」⁽²⁾に応えるためにとられた。

戦局の悪化が進行する中で、四三年九月、京都市内の各大学、高等専門学校では、修業年限短縮による繰り上げ卒業式が举行された。立命館学園では同月一九日、戦争勃発後第三回目の繰り上げ卒業式が行われた。この日の卒業者数は、大学学部五〇〇名、専門学部一二二八名、総数一六二八名であったが、この卒業生のうち、京都で最多数の五〇〇名が陸海軍に入隊していった。⁽³⁾これに先立って、九月八日には海軍諸学校入隊学生壮行会が立命館第一中学校講堂で举行され、大学・専門・予科・高工の学生・生徒三〇〇〇名が参加した。一六日には陸軍特別操縦見習士官に出で立つ卒業生を送る壮行会を大学国清殿で举行した。この繰り上げ卒業組の戦死者の比率が高いことは一般に知られるところであるが、本学の「校友名簿」をみてもそのことは明らかである。

2、一九四三（昭和一八）年一二月の（第一次）学徒出陣

四三年九月二一日、「現情勢下ニ於ケル国政運営要項」⁽⁴⁾が閣議決定され、「国民動員ノ徹底ヲ図ル」こと、その一環として学生の「一般徴集猶予ヲ停止シ理工科系統ノ学生ニ対シ、入営延期ノ制ヲ設ク」こととなった。一〇月二日、政府は勅令第七五五号「在学徴集延期臨時特例」⁽⁵⁾を公布し、「兵役法第四十一条第四項（戦時又ハ事変ニ際シ特ニ必要アル場合ニ於テハ勅令ノ定ムル所ニ依リ徴集ヲ延期セザルコトヲ得）ノ規定ニ依リ当分ノ内在学ノ事由ニ因ル徴集ノ延期ハ之ヲ行ハズ」と定め、全面的に在学徴集延期を停止した。同

日に文部次官名で、各官公私立大学（総）長、官公私立高等専門学校長等宛て次の通牒を發した。⁽⁶⁾

- 一、臨時徴兵検査ヲ受クベキ者ハ現ニ徴集延期中ノ者
- 二、徴兵署開設期日ハ昭和十八年十月二十五日ヨリ同年十一月五日マデ
- 三、内地在留ノ者ノ徴兵検査ハ本籍地ニ於テ之ヲ行フ

これによって、文科系の在籍学生で徴兵年齢二〇歳に達していた者はすべて徴兵検査を受け、その大部分が入営することとなった。一〇月一九日、文部省から發專第二四一号「昭和十八年臨時徴兵検査ヲ受クベキ学生生徒ノ取扱ニ関スル件」⁽⁷⁾が發せられた。これにより、「入営又ハ入団ノ学生生徒ニ対シテハ服役期間中休学ノ取扱ヲナシ其ノ学年修了、卒業、復学等ニ関シテハ左ニ依ルコト」として「大学、大学予科、高等学校、専門学校（之ニ準ズベキ学校ヲ含ム）ノ学生生徒ニシテ明年九月卒業ノ見込アリト認メラル、者ニ付テハ本年十一月ニ於テ仮卒業証書又ハ仮修了証書等ヲ授与シ明年九月ニ於テ卒業又ハ修了セシムルコト」とした。

学徒出陣が決まり、一〇月二一日、文部省・学校報国団本部主催の出陣学徒壮行会が明治神宮外苑競技場において東京都とその近郊七七校の学生参加のもとで行われた。同日のラジオでこの出陣学徒壮行会の中継を聞きながら立命館大学校庭でも壮行会が開かれていた。

一月二〇日には京都の各大学で一斉に出陣学徒壮行会が開かれた。この日、立命館大学出陣学徒は午前八時に出町に集結し、下鴨神社に行軍参拜、武運長久を祈願。その後、植物園で禁衛隊記念壮行会式が行われ、引き続き体錬大会が開催された。その式の模様を『京都新聞』が「松井学長は、誇りを汚さず学園の名

譽に戦ひ抜け」と愛児を諭す激励の言葉を贈れば、わけて内地人同様の資格のもと聖恩に応へる道へ進む晴れの鮮台学徒らは一際感慨深く一死奉公を誓ひ、加茂川に轟く「万歳を絶叫」と報じているところをみると、この壮行会は朝鮮・台湾の外地出身者の壮途を祝す壮行会を兼ねたものであったと思われる。一〇月二〇日に、陸軍省令「昭和十八年度陸軍特別志願臨時採用規則」が公布されて、これにより徴兵適齢もしくはこれを超える朝鮮、台湾出身の学徒も一月二〇日までに志願することを半ば強制された。^④立命館の大学・大学予科・専門学部から五一名の朝鮮、台湾出身の学徒が陸軍に志願したことが学徒出陣者関連名簿及び学籍簿から判明している。この人たちは四四年一月二〇日、陸軍に一斉に入営した。その一方で、志願しなかった学徒三二名が一二月七日付けで総長の命により除名されている。^⑤

四三年一月二三日立命館大学では、仮卒業証書授与式が学内国清殿で挙行された。最高学年在学者で、四四年九月に大学学部及び専門学部を卒業する見込みのある者には仮卒業証書を、大学予科を修了する見込みのある者には仮修了証書が授与された。翌四四年九月、兵役中の者に対しては卒業証書・予科修了証書が留守宅へ郵送によって授与された。

この一九四三年一二月の学徒出陣のために、立命館（文科系）の大学・大学予科・専門学部**に**兵役による休学届を提出して入隊した学徒は一一三六名であり、その内訳は表1のとおりである。休学届を出さずに入隊した学徒もあれば、生きては再び帰れないと覚悟し、退学届を出して入隊した学徒もいることがアンケートなどから判明している。したがって、実際の（第一次）学徒出陣者はこの表の数字より上回ることは確実である。

表1 学部・学科別出陣者数
1943年12月中入隊者

		区	分	入隊者数
大学予科				
専門学部				
	法経学科法律学科 (一・二部)			一七〇
	法経学科経済科 (一・二部)			七九
	法経学科経済科 (一・二部)			二五
	高等商業科 (一部)			四四
	文学科 (一部)			一三
計				一六一
所属学籍不明				二六五
合計				一一三六
				二二一
	東亜法政学科 (一・二部)			三〇六
	東亜経済学科 (一・二部)			一三
	東亜文学科 (一部)			五四〇
計				一七〇

注(1) 人数については「学徒出陣者関連名簿」より算出。

注(2) 出陣日に「即日帰郷」となった分を含んでいる。

出陣者のうち、約八〇％が陸軍に、約二〇％が海軍に入営・入団したといわれているが、立命館の場合も海軍二二％でほぼそれに近い。

一一三六名のうち、陸軍には八八六名、海軍には二五〇名がそれぞれ入営・入団した。海軍二五〇名のうち横須賀第二海兵団（のち武山海兵団と改称）に七名、舞鶴海兵団に一〇八名、大竹海兵団に一〇四名、佐

世保第二海兵团（のち相浦海兵团と改称）に三〇名が入団した。

陸軍の場合は幹部候補生の試験を受け、乙種幹部候補生はそのまま部隊で、下士官に昇任した。甲種幹部候補生は、予備士官学校などに入学した。海軍の場合も試験を受け、合格者は予備学生となった。

参考までに海軍の例をとりあげ、入団した学徒が海軍予備学生として歩んだ経路を示す。¹²⁾

一九四三（昭和一八）年二月一日 それぞれ指定された各海兵团に入団。海軍二等水兵を命ぜらる。

二月二十五日～二〇日 各海兵团において適性検査と学力試験を実施。

一九四四（昭和一九）年一月下旬 試験結果が発表され、合格者のうち飛行科及び飛行要務科の学生・生徒は各海軍練

習航空隊へ、兵科のうち衛所と約三分の一の艦艇（対潜班）の学生・生徒は海軍対潜学校へ、兵科生徒の大部分は旅順特別根拠地帯予備学生教育部へ。また、主計科は海軍経理学校へ、兵器整備の学生・生徒は洲崎海軍航空隊へ移る。この他の予備学生合格者は各海兵团から、すべて武山海兵团教育部の学生隊に移る。

一九四四（昭和一九）年二月一日 海軍予備学生（高専卒以上）・予備生徒（高専在学中）に命ぜらる。以後、各隊や学校で基礎教育を受ける。

五月二十五日

飛行専修予備学生は、土浦空における基礎教程を修了し、北浦空、博多空、第二美保空、百里原空、出水空、大井空等操・偵に分かれて転属し、入隊。以後、飛行機搭乗訓練を受ける。

七月二十五日

基礎教程を卒えた武山海兵隊の予備学生は、それぞれ各術科学校入校を命ぜらる。

一二月 同校卒業。

一二月二五日 海軍少尉（学生隊）及び少尉候補生（生徒隊）に任ぜらる。

一二月二五日 兵科予備学生は実施部隊へ初任地。

一九四五（昭和二〇）年三月 特攻隊編成。各地に進出。

以後、ある者は運よく生還し、ある者は特攻隊員として戦死し、ある者は艦船と運命を共にした。

3、一九四四（昭和一九）年（第二次）学徒出陣

一九四四年四月、海軍軍令部は退勢挽回の決定兵器として、九種類の特攻兵器を海軍艦政本部等に提案、回天（人間魚雷・炸薬一・五トン、一〜二人乗り）、震洋（合板製滑走艇・炸薬二五〇kg、一人乗り）が実現した（『近代日本総合年表』第二版）。六月六日、連合軍は北フランス上陸を開始。六月一五日、米軍はサイパン上陸を開始。七月一八日には三年にわたる東条内閣は総辞職した。一〇月には米軍のフィリピン奪回作戦が始まり、それに対して同月二五日、日本海軍神風特攻隊がレイテ沖ではじめて米艦を攻撃した。

同年、立命館（文科系）からは、大学学部より一八四名、専門学校より二八五名、その他大学予科、所属学籍不明者を含め総数五四二名が入隊した。

五四二名のうち、陸軍には五一六名、海軍には二六名であった。四四年以降、海軍に入団する割合が激減するのはなぜか。単に立命館だけではなく全国的にみてもそうであったのか、調査課題である。

一九四三年一二月二四日の勅令第九三九号「徴兵適齡臨時特例」で徴兵年齢が一九歳に引き下げられた⁽¹³⁾

め、この年入営・入団したその多くは一九歳、二〇歳の学徒たちで占めた。

五月に入ると、通年勤労働員が始まったことも重なって、広小路学舎では学生の姿をほとんど見掛けなくなった。文科系の専門学校一年生も入学後一カ月半ほど授業を受けた後、二〇年八月の敗戦まで勤労働員に従事した。

4、一九四五（昭和二〇）年（第三次）学徒出陣

四五年一月九日、米軍はルソン島に上陸。二月一九日には硫黄島に上陸。三月九日、東京大空襲。四月一日、米軍、沖縄本島に上陸。四月にはヒトラーが自殺、ドイツは無条件降伏した。八月六日広島に、九日長崎に原爆が投下された。同月八日、ソ連が対日宣戦布告。一四日、日本はポツダム宣言受諾を通告、一五日正午、戦争終結の詔書が天皇によって放送された。四三年一二月以降に出陣して、戦死した学徒の大半が戦争が終結するこの年（四五年）に亡くなっている。

この敗戦の年に立命館（文科系）からは、大学学部より一八五名、専門学校より五〇〇名、その他大学予科、所属学籍不明者を含め総数七〇二名が入隊した。このほかに、この年は専門学校工学科・理学科から二一八名が入営・入団している。

二 アンケート調査—その方法と回答状況

編纂室は、一九九二年度後期に学内の関連部課にたいし、戦前・戦中の学内文書資料の調査を依頼し、みつかった残存の非現用文書を編纂室に移管した。その中に一連の（文科系）学徒出陣者関連名簿六冊があった。この名簿をもとにして、調査の手掛かりをつかみ、一九九三年八月から予備調査としてアンケートによる調査を開始した。

これに先立って、六月から、名簿に記載されている氏名と校友名簿との突き合わせ作業を行い、連絡先がわかった人にアンケートを依頼した。対象は、大学及び専門学校の一九四三年から一九四七年までの卒業生に限った。

学徒出陣と不可分の関係にある学徒勤労働員についても不明な点が多いのであわせてアンケートを依頼した。

文科系については「(豊川海軍工廠) 動員日誌 立命館大学勤労働員報国隊本部」(立命館大学国際平和ミュージアム架蔵)に名前が出てくる卒業生で連絡先のわかった方を対象とした。

理科系については、一九四四年六月に専門学校二年生のほぼ全員が軍需工場等に出動していたことがわかっていたので、この方たちが卒業した四五年九月の名簿により送付した。

今回は諸般の事情により、調査対象範囲を限定した。

調査は記述式のアンケートで、その様式は次のとおりである。

表2 学徒出陣・学徒勤労員に関するアンケート回収状況

立命館大学百年史編纂室
1993.12.22現在

学部・学科 等・年	昭和18年卒業		昭和19年卒業		昭和20年卒業		昭和21年卒業		昭和22年卒業		総計		
	発送数	回答数	発送数	回答数	発送数	回答数	発送数	回答数	発送数	回答数	発送数	回答数	
旧制 大学 法文学部	法政学科(1部)	4	0	26	7回	26	12回	14	3	16	7	86	29回
	法政学科(2部)	3	2回	6	1	14	1	7	1回	5	0	35	5回
	小計	7	2回	32	8回	40	13回	21	4回	21	7	121	34回
	経済学科(1部)	3	0	34	10回	50	12回	18	2回	40	9回	145	33回
	経済学科(2部)	1	0	7	2	20	1	6	0	4	1	38	4
	小計	4	0	41	12回	70	13回	24	2回	44	10回	183	37回
	国文学科(2部)	-	-	3	0	-	-	1	0	2	1	6	1
	史学科(2部)	-	-	3	1	4	1	2	0	-	-	9	2
	漢文学科(2部)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	国体学科(2部)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	地理学科(2部)	-	-	2	2	1	1	-	-	1	1回	4	4回
哲学科(2部)	-	-	-	-	-	-	1	0	-	-	1	0	
小計			8	3	5	2	4	0	3	2回	20	7回	
合計	11	2回	81	23回	115	28回	49	6回	68	19回	324	78(14)	
専 門 学 校	法政学科 法政科(1部)	-	-	22	5回	31	7回	-	-	49	14回	102	26回
	法政学科 法政科(2部)	-	-	21	2	15	2	-	-	9	3	45	7
	小計			43	7回	46	9回			58	17回	147	33回
	法政学科 経済科(1部)	-	-	15	2	39	10回	-	-	73	15回	127	27回
	法政学科 経済科(2部)	-	-	21	5回	30	2	-	-	10	2回	61	9回
	小計			36	7回	69	12回			83	17回	188	36(13)
	国語漢文科(2部)	-	-	16	2	3	0	-	-	-	-	19	2
	歴史地理科(2部)	-	-	12	1	2	2	-	-	-	-	14	3
	小計			28	3	5	2					33	5
	工学科 電磁科(1部)	-	-	-	-	30	8	-	-	-	-	30	8
	工学科 機械科(1部)	-	-	-	-	58	15回	-	-	-	-	58	15回
工学科化学工学科(1部)	-	-	-	-	47	9回	-	-	-	-	47	9回	
工学科機械油液科(1部)	-	-	-	-	36	6	-	-	-	-	36	6	
工学科土木科(1部)	-	-	-	-	42	9回	-	-	-	-	42	9回	
理学科 数学科(1部)	-	-	-	-	9	3	-	-	-	-	9	3	
理学科 数学科(2部)	-	-	-	-	0	0	-	-	-	-	0	0	
理学科 物理科(1部)	-	-	-	-	16	1	-	-	-	-	16	1	
理学科 物理科(2部)	-	-	-	-	0	0	-	-	-	-	0	0	
理学科 化学科(1部)	-	-	-	-	19	4回	-	-	-	-	19	4回	
理学科 化学科(2部)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
理学科地理測量科(1部)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
小計					257	55回					257	55回	
合計			107	17回	377	78(13)			141	34(12)	625	129(28)	
総計	11	2回	188	40回	492	106(18)	49	6回	209	53(14)	949	207(42)	

注1：昭和19年3月には法政学科を東法政学科に、経済学科を東亜経済学科に学科名を変更（昭和21年4月1日、学則上東亜の冠称廃止）。注2：昭和19年立命館大学専門学部を「立命館専門学校」に名称変更。注3：欄内の一印はアンケート未発送。注4：（ ）は別紙による未公表体験記録の提供数。

②戦時中の講義や教練のこと

③戦時下の学生生活に関すること

④本学創立者中川小十郎に関すること

⑤徴集猶予停止発令から出陣日まで——壮行会など

⑥八月一五日（戦争終結の詔書放送）の状況

⑦復員・復学・卒業——戦後体験

最後に送付していただいた史・資料の一部を紹介する。

三 アンケートにみる理工系学徒の出陣と動員の状況

1、学徒出陣

理科系学徒の出陣状況については、今回の調査を始めるまでは全く把握していなかったが、本調査実施と前後して、当時の理科系の「生徒異動連絡簿」⁽¹⁵⁾がみつかり、それに兵役情報が記載されており、その出陣の実態も明らかになってきた。

一九四五年二月八日の陸軍省令第六号「修学継続ノ為ノ入営延期等ニ関スル件中改正」⁽¹⁶⁾により、理科系の入営延期をうける学校から専門学校、高等学校がはずされ、それ以降、立命館専門学校工学科及び理学科在学中の学徒二二名が入隊していった。理科系の大学、専門学校、高等学校の学徒はおしなべて太平洋戦争

全期間中、徴集猶予の延期の特典をうけていたように受け取られているむきがあるが、この省令が発令されて以降に立命館から理科系学徒二一二名が出陣したことから推察して、全国的にも理科系専門学校、高等学校在学中の相当多数の学徒が出陣していったことがうかがえる。

アンケート調査（対象・四五年九月卒業生）によっても、「回答数五五名中一〇名が四五年二月八日以降に入隊し、陸海軍諸学校に入校している。さらに、八月一日（敗戦日）以降、九月卒業と同時に陸海軍諸学校に入校することが決まっていた学徒も少なからずいたこともアンケートからわかった。

なお、この二一二名のうち数学科から八四名が入隊している。この数字を見て気づくことは、同じ理科系でも学業が直接、軍需生産増強に結びつかない数学科から入隊した人数が極端に多いことである。

2、勤労働員

一九四四年六月から立命館専門学校工学科二年生のほぼ全員が軍需工場等に動員された。当初、出勤期間は約六カ月の予定であったが、実際は延長されて、工場が被爆して機能しなくなるまで、あるいは敗戦時まで続いた。各出勤先における就労内容や勤務条件などが今回のアンケートを通じてはじめてわかった。

(1) 機械科の学徒八七名は、①大阪製鎖造機株式会社 ②大阪府自動車整備配給株式会社 ③大阪金属工業株式会社淀川航空機製作所 ④三菱軽金属工業株式会社三国工場 ⑤高田アルミニウム株式会社の五社に分散配属され、いずれも航空機や自動車の製造、整備に従事した。

②では、トラック、自動車整備の他、特攻用舟艇「回天？」のエンジン用として、複数の中古自動車のエ

エンジンを解体、よいとこどりをして、一基の完全整備エンジンとして再生出荷した。四四年六月二二日、映画「日本ニュース」第二一二号では生産挺身、自動車修理工場の勤労学徒として上映された。③では、陸軍の双発戦闘機の全組、その他重爆、軽爆の部品製作に従事した。⑤では航空機製造材料であるジュラルミンの圧延材質研究に従事した。

(2) 電気科の学徒約四八名は、①中部防衛通信施設部(大阪中央電話局) ②住友通信工業株式会社大垣製造所に分散配置され、①では情報線(大阪城にある軍司令部に情報を集中、各地より入電する情報をもとに敵機の動向をラジオで流すなど)の保守に当たっており、②では地上の電波の検査やレーダーの製作に従事した。

(3) 化学工業科の学徒六八名は、①東洋高圧工業株式会社大牟田工業所 ②三菱化成工業株式会社牧山工場 ③日産液体燃料株式会社若松工場の三社に分散配属され、防弾ガラスの製作や燃料、薬品の製造に従事した。①では琉安、硫酸の製造に従事した。学友一名の犠牲者を出し、四五年六月下旬には空襲による被害と原材料不足のため学校に復帰した。②は旧旭硝子株式会社で、東洋一の板ガラス工場といわれ、戦時中の統合で三菱化成工業となり、後には「福第七〇一四工場」となった。航空機用防弾ガラスの試作品製造に従事した。すなわち、白板(雷撃機の操縦士の頭と心臓に対する防弾ガラス)の試験研究作業で二交代制(昼間十一時間、夜間十三時間の連続無休作業)であった。約一千度に達する高温の溶解炉に耐えての苦しい作業であった。一部の者は、金属ソーダ緊迫のため、臭化ソーダ・アンモニア溶液電解による連続生産に対するシステム確立の試験研究の助手となった。種々繰り返し試験中に装置異変をもたらし、解体修理すべく作

業中爆発事故を起こし、右手首より先に大火傷を受けた者もあった。治療の薬としてはチンク油を塗布するだけで不自由な生活を強いられた。③では、石炭の低温乾留によるベンジン・コーライト製造に一九四五年五月まで一カ年従事した。

(4) 土木科の学徒約四五名は、同年七月に呉海軍施設部にて研修を受けた後、宇佐海軍航空隊をはじめ大竹などの主要施設部隊に配属された。そこで基地設営のため測量設計やコンクリートの滑走路造り、航空機分散のための道路、壕の築造などの土木工事の技術指導、監督に従事した。例えば、①大竹海兵団の防空退避壕のトンネル築造工事②徳山海軍燃料廠の地下工場や地下貯蔵庫のトンネル築造工事③光海軍工廠の地下工場のトンネル工事④宇佐海軍航空隊所属施設の飛行場滑走路の増設及び補修などに着手した。いずれの軍事施設も米軍の爆撃目標となっており、いつも危険にさらされていた。

(5) 採鉱冶金学科の学徒八二名は、①三井鉱山株式会社神岡鉱業所 ②石原産業株式会社紀州鉱山 ③日本鉱業株式会社尾小屋鉱山 ④日本鋼管株式会社諏訪鉱業所の四社に分散配属された。

①では二〇名の動員配置で全員が寮生活を送ったが、戦時体制下にあるにもかかわらず、食糧、住居環境等の諸々の点で待遇もよく、日常の生活物資の配給もあり、高級職員と同程度の配慮を受けていた。学校からは月二回程度担任と専門学科の先生が職場に巡回出向して重点学科の集中強化の学習授業と生活指導や講義などが行われた。毎日の生活は何の変哲もなく、娯楽設備があるわけでもなく周囲の深い山にかこまれた中で淡々とした生活を余儀なくさせられ、ホームシックにかかる思いの日々を送った。職場は、鉛精錬工場に六名、硫酸製造工場に六名、亜鉛電解精錬工場に八名と各職場作業の工程別に一名から二名又は三名程度

で分散配置となり、正規の係員と同じ程度で、職員に準じた責任者扱いでの処遇を与えられた。職場においては、全部の職域の作業体制が完全二四時間連続勤務の体制のため三交代勤務であったが、学徒だけは昼間午前八時から午後四時までの勤務で週休制度を実施していた。就労報酬は月額で八五円と各個の職場で異なるが特別手当てとして五円程度の加算支給もあった。作業員の中には、南方諸島の戦争で捕虜として強制収容の労働を受けて、日本各地の鉱山で鉱内労働をして転々と職場を変えている英国人の捕虜や朝鮮半島の各地から徴用工員として渡ってきている工員も数多く就労していたので、同じ職場として指導監督することもあった。④では鉄鉱石（露天掘り）並びに鉄鉱石の焼結作業に従事した。同鉱業所では、英米の捕虜約二〇〇名を監督し、作業指導にあたった。

(6) 理学科二年生も左記へ出勤した。

数学・物理・化学科の八八名が、四四年九月から日本製鉄広畑製鉄所に出動した。数学科学徒は、機関車の助手をしたり、小型クレーンの運転をした。化学科学徒は、分析、熱管理、コークス炉、高炉、焼結関係の技術部門に配属された。

同年一月から、そのうちの化学科学徒（人数不明）が東芝通信機余部工場に出動した。そこでの作業は、真空管部品の製造、組み立てが主であったが、一部の学徒は真空管の化学部品ニバレット（ニッケルとバリウムの合金）の研究、製造にも従事した。

以上からみても、理科系学徒も戦力増強のため様々のかたちをとって動員させられていたことがわかる。

(注) 各学科の出動者数は「動員実施調書」(立命館百年史編纂室架蔵)による。

四 アンケート回答内容の一部紹介

このアンケートにつき回答して下さった大部分の方は、「学徒出陣世代」といわれる一九二五（大正一四）年生まれ六九歳以上、一九二〇年（大正九年）生まれの七四歳までの方々である。回答の文面より察するにまだまだ心身とも健康で、かくしゃくとして活躍しておられる様子が浮かびあがってくるが、入院先から回答して下さった方や、最近、本人が鬼籍に入られたためご家族の手によるものもある。その一部分を紹介する。

1、本調査の取り組みについての感想など

・ 本年平成五年が、太平洋戦争（大東亜戦争）時の学徒出陣（第一次）五〇周年にあたるとは、生存者にとって、複雑で感無量のものを覚えます。このたび、思いもかけぬ大学のアンケート調査に接し、改めて五〇周年を回顧させられた次第です。

・ このたび「戦時下の立命館」の真実を調査されることに感謝します。大学の歩んできた歴史を後世に残すのは、大切なことです。出来るだけ多くの人達を対象に事実を集めてください。

・ 学徒出陣は「死」を意味し、戦争に疑問を持ちながら戦場に散っていった学生も多い。死と向き合いながら運よく帰還した学徒もいる。もう古希を迎え、生存者も次第に減りつつある。青春を犠牲にした学徒、兄弟や子供を失った遺族は、この半世紀をどう思い、生き抜いてこられたことでしょう。私と同世代の家内（当時専門学校生）もあの昭和一八年一〇月二一日、明治神宮外苑陸上競技場で行われた出陣

学徒壮行会を見送った一員であり、あの軍楽隊演奏「抜刀隊のマーチ」場面のTVの画面を見るにつけ、お互いにあのいまましい戦争（東京大空襲など）当時を思い出しています。

• このたび、「立命館百年史編纂室」からお便りいただき、学徒出陣、学徒動員当時の実態、又その今日的意義等々いわば現代社会からのご提言を求められ、当時を振り返って我々の存命する限り戦中戦後は終わっていないと、感慨と申しますか、改めて痛感した次第です。思いおこすまでもなく、私にも愚直ながら私なりの戦後をひきずって生きてきました。あれはあたかも青春特有の徒労と狂気が空しくも、民族的な、日本史的なスケールで「戦争」という姿で我々の胸中を通過していったのですが、もちろんそれは論外として今後の皆様の活動にまちたいと思います。私はご提言の範囲でお話し申しあげるが、ただいまにして思えば、根源的なことかも知れませんが、人間欲望と矛盾の存在する限り、それはあくまで冷静であってほしい。あたかも過ぎ去りし彼岸花の咲く秋の野景のごとくさりげない日常風景であってほしいと願うものの一人です。

• 半世紀以上前の記憶を思い出そうといたしますが、どうも戦災による苦しい、悲しい思い出が先に立ち出てこそ、生涯の一番若くて意義のあるはずの学生時代が今になって残念でなりません。このたびの企画は、忘れがちな過去を現在に生きる一人としてどうしても残して置くべき最も大事な事項で、編纂に当たり皆様のご健勝とご活躍を祈念いたします。

• 体験記は思いのまま書いたとはいえ、まことに拙文、冗文でありお許し願います。また、戦闘の状況は、体験記に記述いたしております以外は、あまりにも生々しく書くごとに涙があふれ止むなく割愛させて

いただきました。

2、戦時中の講義や教練のこと

- ・昭和一七年頃、退役石原莞爾中将、伊藤政之助少将、田中直吉教授の憂国の講義に興味があった。
- ・私たちは、出陣前の大学では「世界最終戦論」で知られた石原莞爾・元陸軍中将の戦争史など皇国史観で固まった教育を受け、戦後は、社研で資本論を読んだおかしな世代。
- ・史学科教授の白柳秀湖先生や原隨園先生の二人ともこの戦争には勝てない。必ず負ける。歴史が証明しているのと熱弁をふるわれるのを聞いて信じていました。
- ・第一次学徒出陣の結果、一部学生はほとんど入隊出征、教職員の不足とともに一部授業が不可能となり、やむなく二部との合併授業の措置がとられました。
- ・石原莞爾氏の国防論や、里見岸雄先生の国体学が講義されていた直後に入学し、私など東亜聯盟運動に参加し、田中直吉先生の下で学生部を組織していました。
- ・当時京大から蜷川虎三教授（統計学）、石田文治郎（民法総則）、黒田覚（憲法）の各氏が講師で来られていて、その格調高い内容と高等な話術は私達を魅了しました。ほかに「国体学」という特異な科目が開講されていました。
- ・昭和一九年四月、私は専門学校法経学科法政科に入学した。しかし、授業らしい授業は入学後わずか二、三カ月間もあっただろうか、毎日、教練や武道、朝礼には海軍体操が取り入れられ、専門学部卒業生の

堀生徒隊長の指導のもとに号令一下厳しい訓練を受けなければならなかった。

・理学科は等持院学舎から広小路学舎に移転した。文科系の学生が入隊、動員等で減少した広小路学舎に空き教室が出来たためである。

・御所の芝生の上に学生の談笑する姿はなく、聞こえるものは教練の配属将校が発する号令の声のみであった。あの一年前の大学キャンパスらしい知性は何処にいったのだろうか。私が最も悲しい記憶にあるのは、昭和一八年の二学年の春の終わり頃、予科時代、英文科で教えを受けた奥村三舟教授が勤労奉仕の時間割りを全学生に報告する姿であった。陸軍の軍服を模した草色の国民服を着て、あの地下道入口付近のお立ち台に立った奥村教授の姿から、こんなことは大学本来の行事でないという訴えを感じとった。予科時代の英文授業、あのハックスリーエッセイズを原書で朗々と読んだ感性がいまの大学の我慢の出来ない姿であったに違いない。

・戦中の立命館大学は神宮皇学館の教授が国体明徴論を講じたり、石原陸軍中将の戦争史観のごとき当時代の先端を披露している中で、二部の文科系授業で朝鮮（白スキノエ）の戦いで日本は大敗したと、憲兵にしょっぱかれるような大胆な口述を受けたのを五〇年経過の今日も頭の片隅にはっきり残っております。

・在学中に来校された石原莞爾中将の「世界最終戦論」に強く惹かれた青年期でありました。石原莞爾氏の顕彰の途はありませんか？

・「教練」というものをどうも好きになれず、サボッタリしたので教官ににらまれていたようです。当時

の軍国主義時代に学校教練が不合格などということは全くけしからんことだし、不名誉なことでもありました。これで陸軍に入っても幹部候補生にはなれぬどころか、こんな奴ということでも極端に言えば国賊視されかねないおそれがなかったとは言えない当時の状況でした。ところが海軍は、学校教練は陸軍がやっているのだからというので全く問題にしませんでした。ですから私は海軍を希望したのでした。

3、戦時下の学生生活に関する事

・昭和一八年一〇月一日頃の大学、高専学生の徴兵猶予制度の廃止があるまでは、戦時とは申せ、所謂、「親の脛嚙り」の悠々たる特権の学生生活に浸ることができましたが、やはり食糧不足に悩まされ、大学の講義そっち退けの食事漁りの毎日で、ことに大学の食堂には昼、夕を問わず、一回五〇人分のランチ（四五銭、同年末には廃止）と、雑炊（大豆入り、一杯二〇銭）目当ての登校日参でした。それに加えて、大学校門前にあったアパートと河原町荒神口にも現存する「天狗」という、うどん屋のうどんと雑炊の喰い巡りが日課で胃カタルになる始末でした。

・当時の授業風景ですが、夜学のこととて冬は外套を着、睡魔と闘いながら、寒さにかじかんだ手でノートをとっていました。国・漢科には、中等教員免許状取得目的の方が多く、「昼間の学生よりも熱心で優秀だ」とのおほめをいただきました。当時、小学校教員が多数学んでいました。

・当時の学内は、いつもがらんと置いて学生の姿は、あまり見かけませんでした。というのは、いずれかの学年が工場への勤労働員にかり出されていたからです。学内にいても、休講が多く御所が学生の憂

さばらしの場所でした。他府県からきた学生には食糧事情が悪く雑炊を売る店にならびに行く毎日でした。学徒勤労令が、昭和一九年八月二三日公布されてから、学生の動員が一層激しくなって学校は開店休業のような状態でした。

・予科でドイツ語をとっておりました有志でドイツ語研究会をつくり、正規の授業以外にドイツ語の三人の先生に指導していただいております。当時、東一条にドイツ文化研究所があり、私達研究会の者が出入りしておりました。昭和一七年二月二五日の夜、研究会メンバーだったI君が訪ねて来て、「自分の所に川端警察の特高（特別高等警察）が来た。お前のところにも来るかも知れないから気をつけろ」とのことでした。案の定翌朝、川端署の特高が二人来て、家宅搜索の上、書籍や手紙等を押収し、川端署に私を連行しました。署に行ってみると、I君とM君が前日から留置され、取り調べを受けていました。二月二六日のこととて「私の二・二六事件」としてこの日のことをはっきり覚えております。私は留置されませんでした。毎日「明日また来い」といわれ、いろいろなことを書かされました。例えば、ドイツ語研究会の内容やそのメンバー、歴史観、友人関係など。それが一週間続き結局それで終わり、I君、M君も釈放されました。あとで考えてみると、どうやら当時ゾルゲ事件があつて極秘裡に捜査されている中で私達がドイツ文化研究所に出入りしていたのがにらまれたのではないか、おまけにI君が岡崎の図書館からマルクスの資本論を偽名で借り出していたのも原因でつかまり、赤のグループの疑いがかけられ、捜査の対象になったのだらうということになりました。

4、本学創立者中川小十郎に関すること

・学徒出陣、「立命館サヨナラ」の最後の日、中川小十郎総長が私達を集め、「ドイツは欧州大戦に多くの若者を失ったため、復興が一〇年おくれた。君たちは必ず生きて帰ってくれ。どんなことがあっても生きて帰るんだぞ」と、いわれた言葉は今も忘れていません。

・（昭和一九年四月、二部専門学校経済科）入学式は北大路の立命館中学の校庭でありました。四月というのに肌寒い朝でした。中川総長はその席で、戦時下において大学の存続は邪道であり、専門学校こそ今後の理想像だと自賛しました。若者の晴れの入学式が砂利を敷きつめた殺風景な校庭で、制服は国民服、戦闘帽、勉学への小さな夢が一瞬凍てついたことを今も記憶しています。

・壮行会をおこなっていたきました。その中で、今も記憶に残っていることは、あの広小路学舎のバルコニーから、中川総長先生が、「大学のことは心配するな。出陣した諸君の進級や卒業は保証する。体を大切にして軍務に努め、全員無事に復学してほしい」と、命を粗末にしてはいけないと、それとはなしにいわれたことと思います。

5、徴集猶予停止発令から出陣日まで——壮行会など

・昭和一八年暮れ近くには全国的に学徒出陣壮行会が実施され、京都でも各大学ごとに実施（昭和一八年一月二〇日）。本大学も京都御所建礼門前広場で挙行されました。残留組ながら参加し、時雨の中、決戦報告大捷をスローガンに壮烈極まる気迫ある征途の壮行会でした。

- ・昭和一八年九月末に学徒の徴兵延期が停止されてから入隊するまでの約二カ月間は、私の一生のうちで一番勉強した期間であったような気がいたします。貪るように本を読んだ記憶が懐かしい思いです。
- ・昭和一八年一〇月二日の夜、大阪朝日会館での日本交響楽団（現NHK交響楽団）の演奏を聴き終え外へ出ると、黒山の人だかりで何かと思ひ、のぞいて見ると、大きな柱に号外が張りつけられ、「学徒に出陣決まる」とあり、私に関係あることかと疑ったものです。当日の曲目はベートベンの第五シンホニー「運命」であり、何かと学徒出陣に結びつけて考えました。
- ・わが京都においては各学園単位で壮行会が行われたが、全京都の規模で行う出陣学徒壮行会が行われたという記憶がない。私はいつもこのことについて考えるのだが、大学の都といわれる京都が壮行会を行わなかったのは学徒出陣に対する言わず語らずの抗議として学都京都の一端を示したのではないだろうか。ペンを銃に持ちかえて学園を去る学生を重視する故の出陣学徒壮行会であるから、出陣学徒の一人である私も感謝しているが、京都学園のあり方も判るような気がする。
- ・学友（二部専門学部経済科一年）の中から学徒出陣者があり、物資不足の折から、当時（昭和一八年一月）としては珍しく担任の（担任というのが正しいかどうか分かりませんが）武藤教授を囲んで壮行会を催しました。（写真の）コピーを同封します。

6、八月十五日（戦争終結の詔書放送）の状況

- ・最も悲しい思い出は、昭和二〇年八月一五日正午に放送された聴き取りにくい『玉音』を工場より帰寮

夕食後の再放送で耳にしたことです。全寮生徒集まっただけの静聴。まさかの思いでした。でも何だか生徒も教職員も呆然とした境地の中にも、皆ほっとした感じでした。総てが終わったく放心く耐えに耐えた窮乏生活にも何とも言えぬ明るさと、やっとやってきた安堵感を交々に味わい噛み締める思いでした。

(臨時徴兵検査丙種合格で予備応召組となり、学生の身分でありながら、立命館第二中学出動先の播磨造船所で学校助手として引率監督中)

・終戦の天皇玉音は放送雑音が多く、学校長以下全員宮庭で聴くも一同理解しえず、週番士官、幹候隊長ですら、激励のお言葉と錯覚、激励の訓示を行った。軍はソ聯参戦、原爆投下等により、本土決戦、玉砕覚悟を益々固め、陣地構築、車輛用ガソリン、兵器弾薬を分散埋土に狂奔、降伏による敗戦は夢にも考えられなかった。(陸軍工兵学校にて)

・昭和二〇年八月一五日の正午には学校で授業を受けていたが、重大放送があるということで全員が校庭に整列し、天皇陛下詔勅放送を複雑な思いで聴き止めて早速に教室でクラス全員が討論したが、本土上陸で決戦体制を実行する決死隊編成組や、あっさりと愛国心をもっていさぎよくたがいに相突きあって自決を決行すべきだとする感情をあらわす団結組等で意見が大きく二分したものになり、血気あふれるものになって結論がでないまままで最終的には乱闘さわぎの流血の場面もみられるような結末で流れ解散の場となってしまった。(専門学校工学科採鉱冶金科二年在学中、衣笠立学舎校庭にて)

・終戦の日は、あ、負けたのか、何のために軍隊にきたのかとの思いながらも、その夜には、あ、開放される。家に帰れる。大学へ戻れると思いつつも嬉しさはなにひとつありませんでした。(山口県柳井市

に近い平尾突撃隊(回天基地)

- ・八月一五日、終戦の玉音放送がありました。前日か前々日かどこからともなくその噂が流れていましたので、改めて感慨はありませんでした。あの日、遠くの寮事務所から流れてくる雑音のひどい放送を何の感動もなく、数人の学友達と寮の玄関で聞きました。とはいえ、明日からはじまるであろう全く未知の戦後生活に思いをめぐらし、その不安と横暴を極めた軍隊からの決別、開放の安堵感とで、私達の胸の内は微妙でした。それは、絶望でない空しさと、喜びとは一種違った未知数の自由とが、焦土と化した国土を前にした私達の脳裏を日一日と増幅していくようでもありました。(豊川海軍工廠にて)
- ・二〇年八月一五日、衣笠学舎の前に整列する。終戦の詔勅が下る。あの時の気持ちは！卒業と同時に入隊(しなければならぬ)、自分達は生きていられないと考えていたので、いかに生きるかと、友人達
- 四、五人集まって討議、飯ものどを通らぬ日が一週間も続いたことが思い出されます。
- ・昭和二〇年八月一五日真夏の正午、衣笠山麓の校庭で全学あげて、天皇の戦争終結のラジオ放送を聴き、炎天下、室伏教授らとこれからの日本はどうなるのかを語ったのが印象的。
- ・日本の敗戦、日本人がはじめて経験した本土での終戦は、日本各地で、各々の野戦で、大陸や南の各地でも、その各々の人達のはっきりとしたその最後を見とどけないままの未知の部分を残して幕を閉じました。そして、あれから五〇年、体験した者の一人として申し上げる。あの戦争が五〇年やそこらで結末するはずがない！今そんな思いがこみ上げてきます。
- ・八月一五日、終戦の詔勅が下り、壕掘作業中に中隊長より聞き、呆然自失の数日が続く、互いに米国に

使役として送られ、その後殺されるものと覚悟をしていた。(豊橋陸軍予備士官学校にて)

・当日午前中、教練の査閲の予行演習を御所の広場で行っていた。正午に天皇陛下の終戦の詔勅を広小路学舎の正門広場で拝聴した。内容は聴き取りにくかったが、終戦であるとのことが判明。異常な気持ちであった。配属将校から、おまえたちの進むべき道はただ一つであるとの意味不明の訓示があったのを憶えています。

学校当局から明日から授業を平常通り行うと指示された。他校はほとんど無期限休校が多かった。このことは終戦という異常な事であり、また占領軍が京都に進駐して来ることと重なったためと思う。

(広小路学舎にて、化学科)

・理学科生徒全員が軍事教練の服装で終戦の詔勅を聴いた。前途暗たんとなったが、以後卒業の九月まで自暴自棄となることもなく全員(化学科三九名)が卒業した。

7、復員・復学・卒業―戦後体験

・復員後すぐに復学手続きをするため、広小路にまいりましたが、多くの学生の姿を見て正門前で足がすくんでしまいました。出陣時に中川総長先生が全員無事に帰ってくるよう祈って下さいましたが、果たして二年間の空白で皆についていけないだろうかなど、次々と心配が重なりました。だがすぐに復学手続きをし、経済原論の井上次郎先生を訪ねいろいろと先生から懇切丁寧にアドバイスを受け、おかげで受講のうえ無事に卒業することができました。

・二〇年一〇月末に復員して博多駅に降り立って市街地を見ると一面の焼け野原、二キロメートルほどへだてた博多湾が一望に見渡せる状態には暗たんたる気分になった。我が家は幸い焼けていなかったが、食糧はほとんど底をついていた。復学して学校に戻るか、それとも闇商売でもやって家計を支えるか、ずいぶん迷ったが、とにかく学校に行けるところまで行ってみようと、二二年三月に復学の手続きをとった。京都はほとんど戦災も受けず昔のままのただずまいだったのには今更のように驚いた。

・戦争が終われば我々はなにも九月卒業は意味もなく、全員正規に三月卒業を懇望したのであるが、混乱の時世でもあり、うやむやにトコロテン式に九月末に名ばかりの卒業となったのである。

・大学については、終戦のドサクサで大学ノート一冊買うにも学生証を呈示、広小路の食堂での昼食、物のない時代、今では懐かしい思い出である。今では軍歌は絶対に歌わない。戦死した戦友、学友を思い出す。あまりその時代のことは思い出したくない。これからの終末期を如何に美しく悔いのない人生とするか努力しているところである。

五 送られてきた史・資料

次に送られてきた史・資料の一部を紹介する。

1、「海軍戦闘機献納資金募集趣意書」及び献納艦上戦闘機写真

一九四三年四月から六月にかけて、立命館大学学部、大学予科、専門学部ならびに中学校、商業学校の

全学学生生徒は、海軍戦闘機献納運動を展開、これに呼応して全教職員も起ち、戦闘機二機分八万五千円、二機分を献納した。⁽¹⁷⁾ それに対して、献納者に艦上戦闘機（「第一立命館号」、「第二立命館号」）写真が配布された。今回送られてきた写真の裏には「この二機にはどんな末路をたどったかな？ 知りたいものですね」と書かれていた。

2、「立命館大學禁衛隊出陣学徒壮行体錬大会 十一月二十日」（プログラム）

この日（一九四三年一月二〇日）の壮行会は、『京都新聞』に「鮮台学徒らは……一死奉公を誓ひ」とあることから、朝鮮、台湾出身の出陣学徒壮行会を兼ねたものであったと思われる。外地人学徒を対象に、一九四三年一月二〇日、「昭和十八年度陸軍特別志願兵臨時採用規則」が公布された。この規則により、本学から志願した（させられた）朝鮮、台湾人学徒数は五一名であることが一連の学徒出陣者関連名簿及び学籍簿を調査するなかで判明してきた。彼らは翌四四年一月二〇日、陸軍に一斉に入隊した。

3、「假修了證書」（立命館大学予科）

昭和十八年一月三〇日付け、立命館大学名（学長名が入っていない）で発給している。立命館大学の仮卒業証書授与式は、一九四三年一月二三日、学内国清殿において出陣学徒をはじめ残留学徒ら二〇〇〇〇余名参列のもとに举行された。この大学予科の「假修了證書」は、一〇月一九日、文部省から発専第二四〇号「昭和十八年度臨時徴兵検査を受クベキ学生徒ノ取扱ニ関スル件」の「大学、大学予科、高等学校、

専門学校（之ニ準ズベキ学校ヲ含ム）ノ学生生徒ニシテ明年九月卒業の見込アリト認メラル、者ニ付テハ本年十一月ニ於テ仮卒業証書又仮修了証書ヲ授与シ明年九月ニ於テ卒業又ハ修了セシムルコト」にしたがって発行されたものである。緊迫した戦時下における特別な扱いといえよう。

4、寄せ書き日の丸の旗

五人の方から寄せ書き日の丸の旗の写真が送られてきた。当時、出陣が決まった学徒らは、学友同志が互いに日の丸に寄せ書きしあったようである。その中の一枚に、中川総長、松井学長をはじめとする当時の教員の多数が寄せ書きしているものがある。それには教練担当の配属将校らが他の教授らより一回り大きな字で、署名している点が目をひく。

5、「教練検定合格証明書」

徴集猶予の特典を受けようとする者にとっては軍事教練は必須科目であった。教練を担当する「立命館大学配属将校陸軍大佐 増澤秀敏」名で発給している。「教練」に合格しないと陸軍の場合、幹部候補生に志願する道は断たれた。「教練」でしごかれ、嫌気がさして海軍に入団したものも少なくない。

6、「(勤労働員成績優秀)表彰状」

昭和二〇年四月二五日付け、「立命館専門学校長 松井元興」名で発給している。「成績優秀ニシテ戦力

増強ニ寄与セル所甚大ナリ」とある。この時期はもはや戦局は最終局面に入ってきており、繰り返される空襲と物資の不足も影響して、工場等では欠勤や怠業問題が深刻化していた。そうした状況の下で生産増強を図るため、過酷な労働を課した。なんとか士気を高め、その回復を図るべく、精励にして成績優秀なる学徒の献身にむくいようと「表彰状」を授与した。四四年一〇月に省令でもって定められた「学徒勤労表彰規程」⁽¹⁸⁾にもとづいたものである。

7、「遺書」及び友人による「遺書」の録音テープ一卷

立命館大学専門部法政学科在学中、一九四三年二月一日、陸軍中部五三部隊入営。後、比島戦線で戦死。この「遺書」は、入営二日前に両親宛に書かれたもの。録音テープは、墓参の後、友人が吹き込んだものである。

8、『朝日新聞』（昭和二十年九月六日号）「広告」立命館大学・立命館専門学校学生、生徒諸君（授業開始の知らせ）

文科系学生は入隊、勤労働員等でほとんど学内にいなくなり、授業はほとんど行われていない状態が続いていたが、一九四五年三月一日、「決戦教育措置要綱」⁽¹⁹⁾が閣議決定されたことよって国民学校初等科を除き学校における授業は四月一日より一年間原則として停止することが決まった。これより各校とも事実上授業は行わず、日本の教育の場としての学校は崩壊状態となった。それが敗戦により授業が再開さ

れることになった。

この広告は、立命館大学・専門学校が敗戦より一月も経過しない九月一日に、復員、帰省により、全国にちりじりになっている学生生徒らに向けて、授業を再開することを知らせている。

「来ル九月十一日第一部ハ九時、第二部ハ十八時全員（第三学年ヲ除ク）登学スベシ、当日ヨリ授業開始ス（但シ九月卒業スベキ第三学年ノ授業ハ之ヲ行ハズ）卒業式ハ法、経、文科ハ二十三日、理科ハ二十日、工科ハ三十日何レモ九時ヨリ 決定」

当時、鉄道切符を購入することは至難であったが、広告末尾に「追テ登学ノ為鉄道利用者ハ学生証ト本広告ヲ駅係員ニ呈示シテ乗車券ヲ購入スル様依頼サレタシ」としている。各人、いろいろな思いを胸に秘め、続々と登校してくる学生たちの姿が思い浮かぶ。

文部省は、八月二八日付で、各学校長に「学生生徒ヲ帰省セシメタル学校ニ在リトモ遅クモ九月中旬ヨリ右ニ依リ授業ヲ開始スルコト」⁽²⁰⁾と授業再開の通牒を発しており、立命館もそれにしたがって授業開始の広告を掲載したものに違いない。敗戦直後の混乱と荒廃のなかで、九月中旬、遅くとも一〇月にはとにかくにも日本全国で授業が再開された。

なお、原則「授業停止」の決定となり、他校のほとんどが休校している中で、立命館専門学校理学科は広小路学舎（五月に等持院学舎より移転）にて、同校工学科は等持院学舎にて、授業が敗戦日まで継続して行われていたことが今回のアンケートを通して確認することができた。

本アンケートに回答していただいた方々に深く感謝するとともに、本報告は中間的なものであり、調査自体も予備調査と位置づけているので、今後さらに調査研究をすすめたいと考えている。

注

- (1) 近代日本教育制度史編纂会編『近代日本教育制度史料』第七卷（大日本雄弁会講談社、昭和三十一年）一五一頁
勅令第九二四号「大学学部等ノ在学年限又ハ修業年限ノ臨時短縮ニ関スル件」
- (2) 福岡敏矩著『学徒動員・学徒出陣―制度と背景―』（第一法規出版、昭和五十五年）一一三頁
- (3) 『立命館八十五年史資料集』第八集（立命館史編纂委員会、一九九〇年）二七七頁、（『京都新聞』昭和十八年九月五日夕刊）
- (4) 前掲『学徒動員・学徒出陣―制度と背景―』資料編八一〜八三頁
- (5) 前掲『近代日本教育制度史料』第七卷一七七頁
- (6) 前掲『学徒動員・学徒出陣―制度と背景―』資料編八四頁
- (7) 前掲『学徒動員・学徒出陣―制度と背景―』資料編八七頁〜八八頁
- (8) 『立命館八十五年史資料集』第八集二八九頁、（『京都新聞』昭和十八年十一月二十日夕刊）
- (9) 明治大学百年史編纂委員会編『明治大学百年史』第二卷史料編Ⅱ（明治大学、昭和六十三年）六八六〜六八七頁
一九四三年二月三日、文部省専門教育局長名で各大学長等宛、「朝鮮人、台湾人特別志願兵制度ニヨリ志願セザリシ学生生徒ノ取扱ニ関スル件」を發している。「志願セザリシ者ニ対シ本人ヲシテ自発的ニ休学又ハ退学ス

ル様徳憑スルコト 尚別途朝鮮奨学会及台湾教育会内地在学生連絡部ヨリモ徳憑有之ベキニ付御含置相成度」

(10) 本学の学徒出陣者関連名簿六冊（立命館百年史編纂室架蔵）の内訳。

① 「兵役者名簿」（自昭和十四年至昭和二十年、立命館大学・立命館専門学校）

② 「戦死者・殉難職員学生生徒名簿」（昭和十五年八月以降、法経教務課）

③ 「退学・除名・兵休・復学整理簿」（自昭和十六年一月起至昭和二十年三月迄、教務課）

④ 「主に学徒出陣者・兵役休学者イロハ名簿」（昭和十八年十二月至昭和十九年二月、立命館大学）

⑤ 「退学・除名・兵休・復学整理簿」（自昭和二十年三月起、法経教務課）

⑥ 「応募・入営休学願」

志願・入営した朝鮮、台湾出身の学徒の学部、学科、学年、氏名、入営期日、入営部隊等は、③に記載されている。しかし、日本語に創氏改名をしている学徒が多く、氏名からだけでは朝鮮、台湾出身者であることの判断がつかかねたので、氏名と入営期日（昭和十九年一月二十日）を手掛かりに学籍簿と照合、確認した。

(11) 注(10) ③「退学・除名・兵休・復学整理簿」（自昭和十六年一月起至昭和二十年三月迄教務課）に記載されている。

(12) 『海軍兵科第四期予備学生第一期予備生徒名簿』（海軍兵科第四期予備学生会、平成五年）六〇九頁参照

(13) 前掲『学徒動員・学徒出陣―制度と背景―』一三六頁

(14) 小西康夫「昭和十九年八月中央方面出動学徒勤労視察報告立命館『立命館百年史紀要』第一号一九四―一九六頁

(15) ①「生徒異動連絡簿」（昭和十六年三月―昭和二十二年三月）（工学科）

②「生徒異動連絡簿」(昭和十七年三月、昭和二十二年三月)(理学科)

(16) 前掲『近代日本教育制度史料』第七卷一八七～一八九頁

(17) 『立命館八十五年史資料集』第八集二六九～二七〇頁(『京都新聞』昭和十八年六月五日夕刊、同年同月六日夕刊)

(18) 前掲『近代日本教育制度史料』第七卷一三二～一三五頁

(19) 前掲『近代日本教育制度史料』第七卷二七三～二七四頁

(20) 前掲『近代日本教育制度史料』第十八卷四八八頁

発専一一八号「時局ノ変転ニ併フ学校教育ニ関スル件」

(百年史編纂室勤務)